

## 第14回 帯広の森アクアスロン大会

2010年5月16日（すっきり快晴）

<SWIM 1.5キロ+RAN 12.7キロ>

今回で三回目の出場となる「帯広の森アクアスロン大会」今回も十二分に過酷なレース展開なのだ。

去年は成績一覧表を見ながら、もう少しピッチを上げていれば3人は抜けたのに残念だなあ〜と悔しまぎれに床をトントンたたいてみたり、指をポキポキ鳴らして、ため息をふーふっー。来年は前を走る3人を串刺しにして食べちゃうぞ！一人だけの部屋で密かに盛り上がりながら戦いを締めくくった。

さて今年はその思いをバネにして一人フッフッ、ハッハッと気を吐いて北海道の地に向かった。

しかし競技に入ってみれば腰が痛い。足が重い。息苦しい。めまい、息切れ、咳き込み等々がこれでもかとムチを持って待っていた。

旧来のお友達がヤ〜久しぶり、痛みにはこんなものもあるよ！とわざわざ現れて私の身体をつつき回す。苦行とはこれの事かい？とささやきかけてくる。

半分朦朧としながら走っていると、弱気な自分が顔を出し、いつでもどこでもリタイヤしたっていいんだから無理する事はないよと優しい言葉で誘いをかけてくる。嬉しいじゃないか。

いやだめだ、ばかだってんじゃないよ、戦うために私はいるんだ。甘い誘惑にはまっぴがはいけない。試合の間その呪文のようなつぶやきが繰り返えし、繰り返し襲ってくる。今回も厳しい戦いになってきたぞ。

大会開会式の会長挨拶で北海道以外からただ一人の出場の私に感謝の辞が述べられている。道外からは私一人が出場なので、遠来賞という賞品を毎回頂いている。申し訳ないのでそろそろやめて欲しいものだが、つつい期待してしまいうけない私がいる。

最初の年は豚丼のタレをもらった。うまいタレだ。帯広の名物料理「豚丼」のタレである。十勝ワインが今年の賞品だ。女房が喜んだ。今年は何もらえるだろう？花咲カニなんか頂いたら最高だが、帯広では取れないからそれはないよな。

北海道の何処かの大会では「鮭一匹」が参加賞で貰えたらしい。こんなの貰っ

たらフルスピードで走って帰らなくちゃいけないな。大変な事だ。

さて、今年の参加メンバーはどんな人たちだろう、頂いた大会冊子に目をやれば、なんと！「部坂翁 73 才」がエントリーしているではないか！昨年膝を痛め欠場され、今年はどうかと心配していたが 73 才で復帰とはすごい人だ。堂々の復帰である。

2 年前には泳ぎで 8 分以上の差をつけられ負けているのだから悔しい。その借りをまだ返していない。

昨年惜しくもわずかのタイム差で先を許した 3 人は今回出場していないようだ。私が見えない気迫に押されて敬遠してしまったのだろうか。

そして今回もう一人、気になる存在がいる。「西山氏 64 才」西山整形外科の院長である。西山氏は昨年申し込みをしながら不参加だった。それでも侮れない存在である。年が近い、いかつい体つきで油断できない力強さがその表情に漂っている。これは負けられない。なんとしても勝たねば。

膝に痛みが出ると私は茅ヶ崎駅近くの兼子整骨院で電気治療とホットパットで直しているが、整形外科の院長となれば画期的な方法があるに違いない。足をのぞき見ればかなりごつい。本当に自分の足のままなのか疑わしい。そもそも整形外科という存在があやしい世界だ。身体を整えるふりして身体を切ったり貼ったりするマジックのようなところも感じられる。

昨年エントリーをしながら不参加というのも怪しい。考え始めると怪しいところだらけであるが表だった違反は無いようだ。

今、私たちが付けているゼッケンの下にスポンサー名として西山整形外科と印刷されている。やるな！西山整形外科！

昨年の参加者 31 名。今年は 46 名。今年の参加者はいつになく多い。

今回の参加者もトライアスロンクラブの面々が多いようだ。北海道は雪に閉ざされているのにスポーツが盛んだ。施設は異常に立派。毎日立派な施設で練習しているのだろうか～。

いよいよ試合が始まる。まずはスイム 1500 メートルのスタートからだ。

50 メートルプールを 15 往復である。2 レーンを使い、壁をタッチしコースロープをくぐり隣のコースへ入り折り返す。その繰り返しである。

今年はアレルギー性喘息のような咳というか、胸からこみ上げてくるような結核患者のような咳が続き練習が思うようにできず、すこぶる体調が悪かった。

結局完全には治らなかったが、完全なんておおよそあり得ないのだから、これでよしとしよう。

しかしそういう時は無理ができないので押さえて泳いだり、走ったり、だましましでゴールを目指すうち、レースを終えてみたら役員の人から肩をトントンたたかれ、大会記録でましたね！なんて言われたらどうしよう。

ばかばかしい妄想はともかく、現実を見てみると今年の11月、先の「湘南国際マラソン」では私の前方を走っていたランナーがぼったり倒れすぐに人工呼吸。救急車で運ばれたが亡くなられた事故もある。

昨年夏の「湘南オープンウォータースイミング」大会では、同じグループでスタートして500メートルほどのところで心肺停止で亡くなった方もいる。

次は我が身かときびしくなる。走る前から心配な私だが、元気でも問題が多いので、結核患者みたいな咳をしていたほうがいいのかもしれない。

泳ぎながら咳をする。これがなかなかやっかいなもの、もちろん息継ぎの時に合わせて咳をするのだが、息を吸うのと咳をするのは逆の行為なのだからやってみるとなかなか難しい技だ。

一回の咳で終わらないときは次の息継ぎの時に分けて咳をする。慣れてくればなんでもない。誰にでもできるスイミングテクニックと言える。

同じコースには沢田愛理選手30才がいる（女子デュアスロン世界ランキング1位）早い。50メートルプール周回の何回目かをスイスイ抜かれながらも、その泳ぎの素晴らしさを眺めやる。ターンがさらに素晴らしい。スピードが落ちないまま壁から斜めに隣のレーンに滑り込む様子はアザラシかオットセイ。イルカにも似ているかな。ジーと見ていると顔までアザラシに見えてくるとは言い過ぎか。

混戦状態にあっても強引に抜き去るその技は見事。そんな泳ぎに見ほれていると今何週目を泳いでいるのか分からなくなってきたぞ。私の泳ぎはいつ終わるのだろうか。泳ぎ始めは身体に力が入っているせいかやや疲れを感じるが、5百メートル辺りから疲れは感じなくなり、淡々と手で水をかく動作だけが続く。やがて、頭の中がボーとしてきて記憶をなくした。

今、何週目を泳いでいるのだろうか、やや泳いでいる人が減ってきたようだから、次のターンで最終かな？ペットボトルで頭をガンとたたかれるのを期待してターンを試みたが、ガンがこない。

最後のターンの時（残り100メートル）棒の先端にペットボトルをくっつけ

たもので頭をたたく事が最終の合図なのだが・・・こない。

少年時代から毎日たたかれて過ごしてきたが、ここでも又たたかれるときが来た。弱きを助け、強きをくじく「正義の味方月光仮面」のようでありたいと思っていつも戦っていたが、悪いやつは概して身体が大きくて強いのでなかなか思うようには戦えないものである。そんな戦いが続く内、ご近所からも苦情が来たりして正義がなんだか分からなくなり、気づいてみればいつの間にか悪者になっていて、高校生になった頃には先生にこづかれ、怒鳴られ、さんざんなものである。

大学に入りボクシングを始めたときは強くなりすぎて、たたかれる事よりたたく事ばかりに専念していたが、これはそういうゲームなのだから仕方がない。

今回、たたかれる事をこれほど期待する事になろうとは、世の中何時どうなるのか分からないものだ。

それにしてもたたかれて喜ぶゲーム、又はたたかれる事を期待するゲームがあるなんて思いもよらなかった。他にこんなゲームはそうそう無いだろう。などと考えていると不意に「ボコッ」たたかれた！イテッ！

最後の 100 メートルだ！

去年は頭をたたかれてから目が覚めたように残りの 100 メートルを全速力で泳いだ記憶がある。牛にお尻をけっ飛ばされ、びっくりして猛然とすっ飛ばすような感じである。

最後の 100 メートルで相当疲れたので今年は淡々と泳ごう。何しろ泳ぎの後、12.7 キロの長丁場の走りが手ぐすね引いて待っているのだから。

最終 100 メートルスイムを終え、プールのへりをよいしょと駆け上がりロッカールームへ走る。ヒーヒー言いながら靴を片手に玄関へ向かう。他の選手が見あたらない。

玄関のドアを飛び出したところでスイムのタイムが決定。かなり疲れたな。走り始めたが足が重い、気持ちはもっと重い。まあいいか。今日は日差しが強く暑い日だ。走り始めからこんな気持じゃいけないな。アイスコーヒーがグビッと飲みたいな。少し行くと給水所があるはずだ。

ボランティアのおかあさんが水を入れたコップを持って頑張ってください！と言いながら待っている。水をくれ！立ち止まって水を飲む、うまい！

ボランティアのお母さんはコップを持ったまま走っていくのかと思ったら、ゆっくり立ち止まって水を飲んでいるので心配顔だ。

さてさて、最初の折り返しまではセーブして走るとしよう。苦しいのだから。

おや、前方に部坂翁（73 才）がいるじゃないか！やるな部坂翁！300 メートル程前方だ。これはピッチをあげて食いつき、追い上げなくては、遊んでなんかいられないぞ。獲物が目の前にぶら下がっているじゃないか。

部坂翁のピッチはやや遅いぞ。これなら一気に捉えられる。と思っけてもなかなか捉えられない、相手も走っているのだから簡単には追いつけない。やっと 3 キロ地点で並ぶ。軽く挨拶を交わしさと抜く。とにかく抜くときはサッと抜くのがセオリーである。変にもったいをつけて、じりじり抜こうとすると相手にペースを合わされ引き離せなくなるからだ。

急坂を下りきると一週目の折り返しだ。辛い上り坂で部坂翁と再び声を交わし登り切る。

オオッここで西山整形外科が登場。かなり遅れているな西山整形外科。

私の前方を走っている走者との距離は 300 メートルぐらいか、遙か向こうに感じられる。とても追いつけそうにないから抜くのは諦めるかな。ピッチを少し上げて走っているが差はまったく縮まってくる様子はない。後ろの走者も近づいてこないようだ。我慢の走りが続く。

この帯広の森公園の回りは畑だ。広々とした畑が広がる。帯広の森も広いが帯広全体が真っ平らだ。地平線まで真っ平らな感じだ。じゃがいも畑やら、麦畑のような緑が延々と広がる。そして人はいない。そんな中をひたすら走る。地球上に一人取り残された変人、奇人が目的も分からないまま走っているような感じだ。今日は暑い。

3 回目の大会出場とあって、私の人気もここ帯広にも広まってきたのか、競技中に私を抜き去るランナーから「湘南の風さんですよ～頑張ってください」の声あり、「昨年も参加されてましたね」等々の声援をうける事多々である。（湘南の風とはチーム名の欄に書き込んだ名称である）チーム名と言っても一人しかいないので好きな名前を書けばいい。とにかく苦しみの中、耐えがたき耐え走っているのに、過剰な声援はいささか疲れるのだが嬉しいものである。

調子のいいときの応援はすこぶるいいものだ。2 倍も 3 倍も力が出てしまう。今年の参加者は 46 名。3.5 キロを折り返して走っているのにレースの状況は分かりやすい。

折り返し本部前ではマイクを持った解説者が「神奈川から参加の三枝樹真さんが折り返しに入ってきました」と大きな声での応援である。

いやが上にも盛り上がる。興奮した馬のようにヒヒーンと折り返し場所で息張って見る。折り返し場所に置かれているカラーコーンの回りにはギャラリーがびっしり取り囲み、その大歓声の中を走らせる演出のうまい事。そしてギャラリーの歓声にこたえて再びヒヒーン！

こんな見せ場が用意されているから「帯広の森アクアスロン大会」はやめられない。

この大会の参加選手は帯広トライアスロンクラブのメンバーであったり、函館トライアスロンクラブ、中標津トライアスロンクラブ、ラフネス走遊会とか、伊達アスリート、楽走 412 旭川、メタ部等々。メタ部を除いてほとんどが強そうである。肩書きもすごいが、おそろいのウェアでバッチリ決めている面々もいる。

そしていよいよ残りは 6.5 キロここからが勝負。いつ止めてもいいぐらい疲れているがここまで来て投げ出せない。

朦朧とする意識の中で前に、前にでる。苦しいのはみんな同じである。多分。それでも時々どこにそんな元気があるのと言う早さで、風のように私を抜き去っていく決して若くないおじさんがいたりする。

大会後の資料から考えるにこの人物は「楽走 412 旭川 44 才磯谷法男氏」とみた。すばらしい走りだと感心している間に続いて「楽走 412 旭川 44 才水谷万成氏」が又、私を気持ちよく抜いていく。楽走旭川 412 のメンバーはスイムが苦手で足が速いということか？名前が「法男と万成」普通じゃないペアーだ。二人で一組という感じか？

そうこうして感心している間に又すごいスピードで軽く抜き去っていく若いランナーがいる。これは早い！北海道にはすごい猛者がたくさんいるものだ。

さて“部坂翁”と“西山整形外科”が後ろから追いかけて来るので急ごう。私の後ろにはまだまだ元気者のランナーがいるようだ。

淡々と走っているうちに、いよいよ最後の長い下り坂がやってきた。苦しまぎれに一気に駆け下り、折り返しの赤いコーンをぐるりと回ると今度は長い上り坂が待っている。最後の登りと思えばここもエイヤッと気力で駆け上がる。

坂の上あたりで“部坂翁”が下りてくる「大丈夫ですか！」と声をかける。苦しそうだ。「這ってでもゴールをしますから」と部坂翁の返事。そこまで真剣に答えて頂くと、いささか深刻になるから止めてくれ。とは思うけど恐るべしこの気迫、この意地。

「部坂翁 73 才」の高齢ともなれば膝を痛めて長く練習を止められ、リハビリを続けたら復帰は難しいだろうと思われたが半端じゃないこの気力。

さて、ここまで来たらもう抜かれる事も、抜く事も無いかもしれないと思いつつも、ピッチを上げる。ピッチを上げたまましばらく走り込んでいると、疲れているにもかかわらず身体の切れが良くなってくる事が良くある。

そんな調子の良さをいい事にピッチを上げすぎるとさすがに息苦しい。無理をすると苦しみのどん底に陥るので騙しながらのランニングである。

やがて残り 1.5 キロ程に入ろうとしたその時、横に並んだ女性“大越恭子氏 61 才”がやっと追いつきましたと声をかけるのではないか。

もう抜かれる事は無いだろうと後方のランナーの事は気にもしなかったのに、びっくりである。

実は大越恭子氏は競技前に声をかけてきて、「去年はどうしても追いつけなかったです。」と言う挨拶を頂いてびっくりしたのだ。

密かに私をマークし、あわよくば抜いてやろうと去年の大会から虎視眈々とねらっている人物がいたとは大いに驚きである。

抜き去る作戦は立てていたが、私をねらっている人物がいるとは・・・さらに大越氏は焦ってスピードを上げる私に余裕を見せながら、「昨日はどこに泊まられたんですか？」ぴったり横に並び、質問までしてくるのではないか。「孫の所です」と短く答えながらピッチをやや上げる。相手もぴったり横について離れない。息を切らしている様子もない。そしてさらに、私の前に出ようとする。そうはさせじと再び並ぶ。だんだん走るスピードが上がっていくが、もう負けられない。一步でも後になったらそれっきりぶっちぎられて勝負が決まる局面である。

そんなレッドヒートを展開しているのだから、さっきまで前方を走っていて、間に合いそうもないかと抜くのを諦めていたランナーが目前に迫ってきて、そして一気に追い抜いてしまう。

もう、真剣勝負で無駄口など一言もない。さあ、どちらがあきらめるかおもしろくなってきたなど、もう一人の自分が語りかける。

二人は胸が並んだ状態でじりじりスピードを上げていく。私が前に出ようとする、相手がそうはさせじと前に出ようとする。意地と意地とがぶつかり合い、一步も譲らない。

さらに、ラストスパートをいつ始めるかお互い頃合いを見計らっている様

子がありありだ。

ゴールまで残り 400 メートル辺り、真横に並んだまま全速力に近いスピードである。

さらに、どれだけの余力を残してラストスパートに入る事ができるだろうか。

そして残り 100 メートル。ついに我慢しきれず私は勝負に出た！もう 100 メートル短距離走だ。大きく手を前後に振り切り、腿を持ち上げあごを引く。ダッシュをかけた一瞬の差、身体半分前に出たまま 70 メートルほどが過ぎ、50 メートルが過ぎ、残り 30 メートル。まだぴったりついていようである。

振り返って確かめたいが、もしその隙に前に出られたらもう取り返しがつかない。もう気持ちも体力も限界。振り返る余裕もない。これが天国へのゴールだとしたらそれでいい。

大きな歓声とゴールのテープが目前にある。競り合っている彼女はすぐ後ろにいるはず、さらに力を振り絞り猛然とテープを切る。

テープを切ってもまだ全速力で走る。もう止められない。止める力も残されていない。振り返る力はないが前に向かって全速力。彼女をどのくらい振り切る事ができたのか見たかったが身体が止められなかった。

どこまでいくの？という応援の人々の視線を振り切るように大きく前方まで走り込み、ゆっくり倒れる。そして後ろをふりかえったが、そこには彼女の姿はなかった。勝った！

苦しみ、もがきながら、渡されたポカリスエットを握りしめ口に運ぶ。うまい！

記録によれば大越恭子氏を 3 秒引き離れたそうだ。

部坂翁は 8 分ほどの遅れでフィニッシュ。途中で歩かれたようだが大健闘である。今日の調子からまだまだ走れそうなので、来月のトライアスロン大会に出場する事にしますと言い残し去っていった。

## 記録

1 時間 49 分 07 秒・・・(スイム, 37 分 59 秒) (ラン, 1 時間 11 分 08 秒)

## 今年の記録

1 時間 47 分 36 秒・・・(スイム, 36 分 21 秒) (ラン, 1 時間 11 分 15 秒)

三枝樹